

「末摘花」巻における琴きんを「ほのかに掻き鳴らし」

——『うつほ物語』の「俊蔭」巻と比較して——

李 暁 梅

はじめに

光源氏は春・秋の二度故常陸宮邸を訪れている。この二度とも末摘花の琴の音を「ほのかに掻き鳴らし」と聴いている。そして、二度目の「八月二十余日」の夜に、とうとう隔ての障子を押し開けて侵入してしまう。この巻は、契りを交わすことを境に、その前半では末摘花の「琴」をめぐって物語が展開している。

一条兼良の源氏物語注釈書である『花鳥余情（注）』は、春の臘月夜に「ほのか」な琴の音を聴き、荒れ果てた故常陸宮邸を眺める源氏の心情描写——「昔物語にもあはれなることどももありけれ」について、それが「うつほ物語」の「俊蔭」巻で、俊蔭の死後、その娘が荒れ果てた邸で琴を弾いていたが、偶然通りかかった、時の太政大臣の若君が垣間見て一夜の契りを交した事件を指している、という。中川正美氏は、「末摘花」巻の形成について、「宇津保物語への対抗意識」による「俊蔭巻を視座に入れての反転の物語（注）」と指摘しておられる。とりわけ、「琴」に関する「俊蔭」巻からの投影といえは、源氏が末摘花姫君の琴に魅了され、契りを交す事態に進展するというあらすじだけでなく、琴の音色を修飾するという具体的な表現「ほのかに掻き鳴らし」をそのまま受け入れる点もある。

紫式部は「ほのかに掻き鳴らし」を通して、女主人公・末摘花のどのような心情を表そうとしているのか。その弾

き方がどのような反応を引き起こしているのか。彼女の琴の音色が月などの自然風物にまたどのように作用されているのか。先行作品『うつほ物語』『俊蔭』巻が「末摘花」巻の「源泉になりながら、両者の相違点はどのようなところにあるのか。」「俊蔭」巻における俊蔭の娘と若小君の一夜の逢瀬の場面と比べて考えてみたい。

一 「ほのかに掻き鳴らし」と女主人公の心象

末摘花は亡き父・故常陸宮の面影を思い浮かべるために、その遺愛の琴を掻き鳴らしている。「ほのか」な琴の音は、聞く側にある源氏が感受した音色ではあるが、後見人のいない娘一人の心細さが伝わってくる。彼女の琴のみを友とする寂しい暮らしについて、取次ぎの女房・大輔の命婦は、次のように源氏に紹介している。

故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りぬたるを、(中略)命婦「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはず。かいひそめ人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、

①「末摘花」巻 二六七頁

琴は彼女の唯一の話し相手である。親に先立たれてひっそりと心細く暮らしている中、夜も昼も、誰にも会わず、琴だけを格別に親しい友と思つて大事に見守つている。彼女の才芸——琴について、源氏は、春の臘月夜にはじめて故常陸宮邸を訪れた際に、「ほのかに掻き鳴らしたまふ」のを聞いて、次のように感想を述べている。

をかしう聞こゆ。なにはかり深き手ならねど、物の音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。

①「末摘花」巻 二六九頁

先ず、興味のある音色であることを評価する。その技量がそれほどに上手というわけではないが、もともと品位の高

い琴の音が格別なもので、聞き苦しいまでの感を受けていない、という。それよりも、源氏が「ほのか」な琴の音に耳を澄ましながら、思いが目の前の、昔の名残もなく荒れ果てた邸と重ね合わさつて、立派な父親王がおいでなさつた時の姿を正しく守ろうとする姫君の心の奥底に隠れている苦しみや悲しみを推察し感慨に耽つている。

いといたう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、(後略)

①「末摘花」巻 二六九頁

言い換えれば、姫君本人は昔のままに琴を掻き鳴らしている。しかし、伝わってきた「ほのか」な琴の音は、聞く側に悲しい印象を与える効果が生じる。即ち、後見人のいない、苦勞を重ね重ねしてきた、悲しい寂しい中にあるあわれな姫君像を思い浮かべるのである。この点について、その直後の、演奏を中断する理由を述べる命婦の話にも出て

いる。

いとかすかなるありさまに思ひ消えて、心苦しげにもしたまふめるを、(後略)

あるかなきかのような、父親のいないみすばらしい様子に、心に痛みを感じるほどである。その苦しみと悲しみが明らかに

八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへのこと語り出でてうち泣きなどしたまふ。いとよきをりかなと思ひて、御消息や聞こえつらむ、例のいと忍びておはしたり。

月やうやう出でて、荒れたる籬のほどとましく、うちながめたまふに、琴そそのかされてほのかに掻き鳴らしたまふほど、けしうはあらず。

①「末摘花」巻 二七九頁

明月が出るまで待たずにはおられない姫君が、松の梢を吹く秋風の音が心細く聞こえて、昔のことを語りながら偲び

泣いている。月が出て、命婦に勧められ、いつものように琴を「ほのかに」掻き鳴らす。後に、雪の夜に源氏が故常陸宮邸を垣間見る場面があるが、女房の一人が、寒い中「故宮おはしまし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくとも過ぐるものなりけり」と苦しみに堪えず昔を偲ぶ。それと合わせて、この「ほのか」な琴は、明月に向かつて父親王を偲び泣いた後、頼りがなく、荒れる庭を眺め、悲しみが極まる寂しい心象が一層鮮明に表されている。しかし、この悲しい音色は、春秋の情趣のある風景に調和され、寝殿の外で自然の風物を眺める源氏にとつて、かえって風情のあるように聞こえてくる。春の場合は、臘月の下で、梅の香りが漂うなか、情趣のある音色が伝わってくる。秋になると、月の出を待ち、星の光だけがあつて、風の音を心細く聞きながら、昔父親王がいた頃のことを思い出して悲しんで琴を弾く。この両者は対照的でありながら、季節の情趣と悲しい境遇が調和していることによつて、上手ほどではない末摘花の琴が勝っているように聞こえてくる。これが故に、命婦が「よきをりかな」「いとよきをりかな」と思ったのである。

その一方、突然目の前に現れた若小君を相手に、身の上を尋ねられた俊蔭の娘は、「ほのか」な琴を通して、亡き父を偲ぶ心情を表しているというよりも、父を亡くした後の零落を恥じる、身の上の儂さ、わびしさを悲しむ意を伝えていくように思われる。そうした彼女の心象は、若小君への返事を通して伺える。

(前略) 若小君、「あなおそろし。音おとしたまへ」とのたまふ。「おほろけにてはかく参り来なむや」などのたまへば、けはひなつかしう、童わらわにもあれば、少し少しあなづらはしくや覺えけむ、

俊蔭娘 かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはありとも思はざらなむ

とほのかにいふ声、いみじうをかしく聞こゆ。いとと思ひまさりて、若小君「まことは、かくてあはれなる住まひ、などてしたまふぞ。たが御族みづかにかものしたまふ」とのたまへば、女、「いさや、何にかは聞こえさせむ。かうあ

さましき住まひしはべれど、立ち寄り訪ふべき人もなきに、あやしく覺えずなむ」と聞こゆ。君、「疎ときよりとしもいふなれば、おほつかなきこそ頼もしかなれ。いとあはれに見えたまへれば、えまかり過ぎざりつるを、思ふもしるくなむ。親ものしたまはざなれば、いかに心細く思さるらむ。たれと聞こえし」などのたまふ。答へ、俊蔭娘「たれと人に知られざりし人なれば、聞こえさすともえ知りたまはじ」とて、前なる琴をいとほのかにかき鳴らしてゐたれば、この君、いとあやしくめでたしと聞きあたまへり。夜ひと夜ものがたりしたまひて、いかがありけむ、そこにとどまりたまひぬ。

①「俊蔭」卷 五三頁(正)

彼女の返事は、若小君が親しみやすい元服前の少年で、遠慮がいらないう、というやや安心した気持ちがあつたから応えたものである。初めは、暗い中、気味悪く感じた若小君が「何か話してくれ」といったことに対して、彼女は「ほのかに言ふ声」で和歌を詠み、蜻蛉のようにあるかなきかにほのめくように暮らしている自分のことをもらす。その次に、どうしてこんな寂しい生活を送っているのかと聞かれた時に、彼女は驚くほどのひどい暮らしをして、訪れる人も無いのに、あなたは変に思わないかと、逆に相手の気持ちを確かめる。さらに、父親のいない、女一人でどんなにか心細いであろう、父親は誰かと聞かれた時に、彼女は親の名前を言つても知らないだろうと応えながら、それに「琴をほのかに掻き鳴らし」の動作を附加する。「ほのか」な琴は、「ほのかに言ふ」声と対応して、自分がおかれている侘しい現状を恥じて、心細い暮らしと身の上の儂さを悲しむ俊蔭の娘の心情が婉曲に表されている。

比べてみれば、末摘花も没落した貴族の姫君として貧困に陥っているが、住居がまだ存在し、何人かの女房がそばにいる。しかし、俊蔭の娘の場合は貧窮が極度に達している。俊蔭の娘の「ほのか」な琴からは、一層身の辺りの荒寥さ、自らの存在の不確かさが味濃く伝わってくるように思われる。例えば、彼女の悲しい暮らしぶりについて、本文ではこのように描かれている。

(前略)もの心も知らぬ娘一人残りて、ものおそろしくつましければ、あるやうにもあらず、隠れ忍びてあれ
ば、人もなきなめりと思ひて、よろづの往還ゆくわんの人は、やどどももこぼちとりつれば、ただ寢殿しんたんとひとつのみ、簀子すねこ
もなくあり。ほどもなく野のやうになりぬれば。娘はただ、乳母めのとの使ひける従者すまの、下屋しもやに曹司せうししてありける
をぞ呼びて使ひける。父ぬしのいひしごと、所々の莊より持て来しも、使やりなどしてはたり持て来しときこそ
ありしか、かくむげになりぬれば、ただ預りのものよろこびにてやみぬ。はかなくうち使ふ調度せうどなども、親た
ちの亡くなりけるさばぎに、とりかくしてしかば、みな失せはてにけり。

①「俊蔭」巻 四七頁

つまり、世間は彼女の存在すら知らなかった。往來の人々が家を壊して持ち去ってしまったので、ただ寢殿一つだけ
で、簀子も朽ちてなくなっており、邸内は野原のようである。使用人もただ亡き乳母が使っていた下女一人だけであ
る。所々の莊園から獻納された物資も管理人に横領され、日常用の調度品や道具類なども誰かに取られている。すべ
てはなくなってしまうたという状態である。まさしく彼女が歌に詠んでいるそのものである。

俊蔭娘

わび人は月日の数ぞ知られける明け暮れひとり空をながめて

雑草が一面に生いはびこっている中、空を眺めて明けても暮れても沈みこんで月日を送っているのである。したがっ
て、彼女が思ったように、人の訪れは極めて珍しいことであり、驚くことである。と同時に切に期待していたことであ
らう。その返事——「ほのか」な琴の音には、しきりに自分の素姓を尋ね、知りたいとする若小君への、かすかな
感動と喜びという感情の流露も託されているように思われる。

ただし、この出会った時の「ほのか」な琴は、契りを交わした後、別れ難い若小君が再度彼女の親の名前を尋ね、
覚えようとする時に、彼女が前と変わらなく身の上を明かさず、「かたはらなる琴を掻き鳴らし」とは異なる。後者は、
たとえ、ここが朽ちて自分がいなくても、この琴の音を辿れば、再会できることを暗示し、自分はどこかでこの琴と

共に生きている、との意を表している。この「別れの琴」は、後に兼雅が北野の行幸で、琴の音を尋ねて山に入り、
仲忠に合ひ、母子を迎えるという物語の展開と照応している。比べて、「ほのか」な琴は、零落を恥じて、ちゃんと
した家ものではない、名乗るものではない、という相手の尋ねられたことを逸らしたい俊蔭の娘の意識の働きが反
映されている。

このように、「ほのか」な琴は後見人のいない娘一人の心細い心象が表されている。俊蔭の娘は、突然現れてきた、
親しみやすい若小君を相手に、貧窮に陥っている身の上の儚さ、自分の素姓を尋ねる若小君に出会って、かすかな喜
びなどの複雑な心情を「ほのか」な琴を通して伝えている。それに対して、見あらわされる前の末摘花は女房にそそ
のかされ、父親王がいた頃の昔のことを偲ぶ一つの思いで、古風なままに「ほのか」な琴を掻き鳴らしている。やが
て、源氏という新たな後見人が現れるにつれて、「ほのか」な琴という心象表現は、彼女の中になくなっていくので
ある。

二 「ほのかに掻き鳴らし」と物語の展開

末摘花は琴の技量がそれほど上手ではない。しかし、源氏は春の朧月夜にひそかに聞いた「ほのか」な琴に心惹か
れ、秋の「八月二十余日」に再び忍び訪れる。このような展開になったのは、まず、末摘花が琴に堪能であった故常
陸宮の姫君で、弾いた琴が故常陸宮の遺愛の品だからである。

故常陸宮の承譜について、桐壺院の、あるいは先帝の兄弟でもあったのだろうか、という説（注）があるが、作品では定
かに記されていない。しかし「上流貴族、あるいは皇族の姫」でもあるものと思われよう。皇室と繋がりのある

孫王であることは、源氏が末摘花へ親近感を持てる一側面になるが、まして宮は琴の名人である。「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ」という源氏の言葉から、名高い故常陸宮の超凡な技量を体験したことが伺われる。したがって、晩年にえて寵愛なされた姫君はきつと父親王の深い造詣を受け継いで、よい趣味を持つているに違いない、という源氏の推断はごく自然であろう。源氏はこの頃、琴の名高い家系の姫君に注目する背景に、亡き夕顔のようなものやわらかで心のなごむ女とめぐり逢い、琴を介して心が通い合わせる深みのある恋を実現したい、という切実な願いがあつた。

ところが、末摘花のそれほどでもない技量を懸念する大輔の命婦は、その未熟さを源氏に察知されないうちに、空が曇ってくることや来客を予定していることなどを口実にして、僅かしか弾かせず、良いほどに切り上げさせている。興味津々とやってきた源氏にとって、当然、もの足りない演奏になつてしまつたが、「ほのか」な琴の音を耳にしな

がら、彼の思いに現れたのは、やはり「さばかりの人の」故常陸宮である。

古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、
①「末摘花」巻 二六九頁

故常陸宮のような高い身分の姫君だからこそ、昔風に重々しく大事に養育なされたのであろう。今のように昔の名残さえなく、荒れ果てた邸に一人ぼっちで住んでいて、どんなにか悲しい物思いの限りを尽しているのであらう。近付いて話したいが、故常陸宮の姫君だから順序も踏まずぶしつけである。父親という大きな存在が常に脳裏にありながら、「ほのか」な琴を通して、姫君の心に隠れている苦しみと悲しみを察知し、接し方を慎重に計らうとする源氏である。

命婦の仕業で短い演奏しか聞けなかつた源氏は、寝殿から戻つてきた命婦に「なかなかなるほどにてもやみぬるかな。もの聞き分くほどにもあらで。ねたう」と咎め、「なほ、さやうの気色をほのめかせ」と、姫君に執心する意向を示す。「ほのか」な琴の音は、源氏の心に描いた姫君のイメージをますます奥ゆかしく思わせ、姫君への美的思い込みを一層助長させることになる。

夏が過ぎて、源氏が再度故常陸宮邸に忍び入つてしまつたが、それが主に恋のライバル・頭中将が絡んでいるので、彼には「まけてはやまじ」という競争心に駆られて取つた行動である。

春の朧月夜に、頭中将は源氏の後をつけて、故常陸宮邸から聞こえてくる「ほのか」な琴を蔭で立ち聞きした。笛の名人の彼も源氏と同じように「ほのか」な音色に心惹かれてしまつた。その直後、二人は左大臣邸に帰つて、左大臣の高麗笛が加わつた笛吹きの合わせや、琵琶の名人の中務の君の存在があつたにしても、末摘花の「ほのか」な琴はまだ余韻が響いているようで、彼ら二人の記憶から去らないのである。

君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、様変へてをかしう思ひつづけ、あらまじごととに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねるたらむ時、見そめていみじう心苦しきは、人にももて騒がるばかりやわが心もさまあしからむなどさへ、中将は思ひけり。この君のかう気色ばみ歩きたまふを、まさにさては過ぐしたまひてむやと、なまねたうあやふがりけり。
①「末摘花」巻 二七四頁

頭中将は、あのようなわびしい住まいに通つたら、世間はどんなに騒ぐだろうと妄想し、それを聞いた源氏は、このままでは済ませないだろうなど、いまいまして気がかりになる。それより、源氏の競争心をいっそう掻き立てたのは、頭中将も手紙を送り、返事がこないため、源氏にだけは返事があつたのだからと邪推することを知つたからである。じれつたい源氏は大輔の命婦に手引きを促す。

源氏「おぼつかなくもて離れたる御気色なむいと心憂き。すきずきしき方に、疑ひよせたまふにこそあらめ。さ

りとも、短き心ばへつかはぬものを。人の心のどやかなることなく、思はずにのみあるになむ、おのづからわが過あやまちにもなりぬべき。心のどかにて、親兄弟おほはなちのもてあつかひ恨むるもなう、心やすからむ人は、なかなかなむらうたかるべきを」とのたまへば、(後略) ①「末摘花」卷 二七六頁

源氏にとつて、末摘花は亡き夕顔の代わりでありながらも、琴を通じて心の隔たりのない恋を実現したい「女」であり、決して頭中将に奪われてはならない存在である。思わぬ頭中将の出現とその競争は、一日も早く姫君のそばでその琴を聞きたい源氏が、遂に「秋の二十余日」に再度訪れる要因となる。

その一方、俊蔭巻における若小君と俊蔭の娘の逢瀬の場面では、俊蔭の娘の琴が三度登場している。はじめは、荒れ果てた邸に立ち寄る若小君は、俊蔭の娘の「みそかに」掻き鳴らした琴の音を耳にして寝殿に入る。その次に、女君に会つて話を交し、「ほのか」な琴に魅了され深い約束をする。三度目は、夜明け前の別れる時に、俊蔭の娘が悲しく再び琴を掻き鳴らす。

若小君が俊蔭の娘の「ほのか」な琴に魅了され契りを交わす、という物語の展開は、まさしく俊蔭の娘が父親に秘技を伝授された、この国の唯一の琴の秘手であるための、すばらしい技量を持っているからである。「同じくかき鳴らす声、父に勝る。父が弾く手、一つ残さず習ひとりつ。」①「俊蔭」卷 四四頁とあるように、彼女は父親よりさらに優れている。

そして、彼女が弾いたのはただの琴ではなく、「りうかく風」という、「ほそを風」「やどもり風」「やまもり風」「せた風」「はなぞの風」「かたち風」「みやこ風」「あはれ風」「おりめ風」「なん風」「はし風」とその他の無名の琴と共に、父親俊蔭が半生を費やし、命を賭けて習得してきた秘琴である。「りうかく風」の靈妙さとその奇瑞の力について、住みよいうつほで、俊蔭の娘が子供の仲忠に琴を習わす場面に出ている。

りうかく風をばこの子の琴にし、ほそををばわれ弾きて習はずに、聴くかしこく弾くこと限りなし。人氣ひとけもせず、獣けもの、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたきわざをするに、たまたま聞きつくる獣、ただこのあたりに集まりて、あはれびの心をなして、草木もなびく中に、尾一つ越えて、いかめしき牝メ猿、子ども多く引き連れて聞く。この物の音を聞きめで、大きなるうつほをまた領うじて、年を経て、山に出で来るもの取り集めて住みける猿なりけり。このものの音にめで、ときどきの木の実を、子どももわれも引き連れて持て来。

①「俊蔭」卷 八〇頁

その琴の音を愛でて、山の獣たちは集まってきて、大きな牝猿は子猿を引き連れて木の実を運んでくる。したがって、若小君は足が止まったことも、「りうかく風」の美しい妙音に魅了されてしまったからであろう。

(前略) この君、いとあやしくめでたしと聞きあたまへり。夜ひと夜ものがたりしたまひて、いかがありけむ、そこにとどまりたまひぬ。

かくて、あはれにいみじく、心細げなるけしきを見たまひしより、思ひつきにしを、まして近く見ては、いま千重ちへまさりて、あはれにかなしく思ほえて、親の御もとに帰らざらむも何とも覺えたまはねど、(後略)

①「俊蔭」卷 五四頁

若小君は不思議なかつ素晴らしい「ほのか」な琴の音に心引かれ、いろいろと語り合つて、そこに泊まってしまふ。心に沁みて女君の様子をみて、愛慕の情がつく。近く見て後、愛情は千倍にもまさる。この女がいたわしく愛しく思われて、このまま親のもとに帰らなくてもなんとも思わないのである。

このように、「ほのか」な琴は恋物語の始まりに出ている。源氏も若小君も女主人公の「ほのか」な琴の音に心が惹かれ、契りを交わすという事態に進展している。若小君は俊蔭の娘の素姓を知らずに、ただ秘琴の不思議な音色に

惹かれてしまうことに対して、源氏は春には、琴の名人・故常陸宮という父親の琴への関心を持つて、その姫君である末摘花の琴を望んでおり、秋には、頭中将の競争に負けないように再度訪れているのである。

三 「ほのかに掻き鳴らし」と月などの自然風物

春の臘月も、秋の「八月二十余日」の明月も、源氏が「ほのか」な琴に興味を引かれることに大いに作用している。臘月夜は、湿気の多いため、琴の機能を發揮するのに不利な条件ではあるが、それに「梅花」が調和したことで、「ほのか」な琴の音が引き立って聞こえてくる。この点について、命婦の一連の反応から確認できる。

のたまひもしるく、十六夜の月をかきほほどにおはしたり。命婦「いとかたはらいたきわざかな。物の音すむべき夜のさまにもはべらぎめるに」と聞こゆれど、源氏「なほあなたに渡りて、ただ一声もよほしきこえよ。空しくて帰らむがねたかるべきを」とのたまへば、うちとけたる住み処にすまたてまつりて、うしろめたうかたじけなしと思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかきほを見出だしたまふ。よきをりかなと思ひて、(後略)

①「末摘花」巻 二六八頁

命婦は十六夜にやってきた源氏に、琴の音色が澄んで聞こえる空模様ではないと難色を示す。それにしても、是非とも姫君の琴を聞かせてほしいという源氏の所望を拒否することができず、仕方が無く寝殿に参上する。その時、彼女の目に映ったのは、姫君が格子を通して梅の香を賞美している一コマである。ちょうど良い時だよと、やや安心して姫君に頼む。即ち、春の臘月夜の梅の香りが漂う時には、末摘花のような上手と言えるほどではない「ほのか」な琴でも、風情のあるように聞こえてくるからである。

「臘月夜と梅と琴」という組み合わせは、若菜下巻の、「正月二十日ばかり」の六条院の女楽においても出ている。正月二十日ばかりになれば、空もをかきほほどに、風ぬるく吹きて、御前の梅も盛りになりゆく。おほかたの花の木どももみなけしきばみ、霞みわたりにけり。臥し待ちの月はつかにさし出でたる、

④「若菜 下」巻 一八五頁

しかも、源氏と長男の夕霧の間で行われた、音楽に関する春秋優劣論では、夕霧が特に秋の月よりも春のおぼろ月が勝っていると強調している。

大将の君、「秋の夜の隈なき月には、よろづのものとどこほりなきに、(中略)春の空のたどしき霞の間より、朧なる月影に、静かに吹き合はせたるやうには、いかでか。笛の音なども、艶に澄みのほりはてすなむ。女は春をあはれぶと古き人の言ひおきはべりける、げにさなむはべりける。なつかしくものとのほることは、春の夕暮こそことにはべりけれ」と申したまへば、

④「若菜 下」巻 一九四頁

彼は「女は春をあはれぶ」という『詩経』の言葉を引きいて、薄い朦朧とした月光の下での女性の楽の音は優しく、一層引き立つという。この論は、後の源氏も加わり、打ち解けた演奏によって実証されているが、とりわけ女三の宮の琴は格別である。

月やうやうさし上がるままに、花の色香もてはやされて、げにいと心にくきほどなり。(中略) 琴は、五箇の調べ、あまたの手の中に、心とどめてかならず弾きたまふべき五六の撥を、いとおもしろくすまして弾きたまふさらにかたほならず、いとよく澄みて聞こゆ。春秋よろづの物に通へる調べにて、通はしわたしつづ弾きたまふ心しらひ、(後略)

④「若菜 下」巻 二〇〇頁

自然風物と宮の琴について、藤河家利昭氏は次のように論じておられる。

季節のどんなものにも通わせて弾くことが出来るのは宮の琴だけである。この場合では月と梅の花であろうか。末摘花の巻でも、琴を弾く時に春の朧月夜と梅の花があった。宮はこの月と梅の花によってその力を十分に發揮出来たと考えられる。(中略)宮の琴が前よりも勝っているのは、この月を初めとする春の風物が作用していると考えられる。その上に宮の琴は春秋あらゆるものに通う調子であった。^(註)

同じく、末摘花の琴も春だけでなく秋にも通うものである。星の光だけがきらめいた風景や松の梢を吹く風の音などの秋のわびしい気配は、姫君に心細さを募らせ、昔のことを泣きながら思い出させている。悲しい心情の元で弾いた「ほのか」な琴の音が、またようやく出てきた明月に作用され、いっそう風情のあるように聞こえてくる。命婦の「いとよきをりかな」と思ったことや、源氏の「けしうはあらず」と感じたことは、まさしくこのような季節の情趣と悲しい境遇の調和から生じた末摘花の琴への僅かな期待と評価であろう。

その一方、俊蔭の娘と若小君の一夜の逢瀬の場面においても、「月」をはじめ秋の風物が出ている。特に月の場合、徐々に上っていくものではなく、「八月中の十日ばかり」の山の端に次第に入っていく、という早く沈む「明月」が取り上げられている。その沈む具合は、若小君の、荒れ果てた俊蔭邸内に入り、寝殿にさらに俊蔭の娘が隠れている塗籠に近づく、という行動と同時に移動しているように描かれている。言い換えれば、若小君にとって、どこまでも澄んでいる月は、荒れ果てた俊蔭邸、情趣深い庭を案内してくれる明かりであり、月の姿が隠れて、辺りが暗くなることは「女」に早く会いたくなる思いが生じる切掛である。二人の対面、会話、さらに「琴をほのかに掻き鳴らし」たことは、明月が山の端に入った後の、月の影がかすかに残っている時であるが、月の移行とその後の朦朧とした情景は、男女交情の場面において、特に若小君にとっては、「ほのか」な琴の音が一層情調的に聞こえてくることに働きかけているように思われる。

こうした表現効果が生じたのは、月が大いに若小君の心理に作用しているからである。月が中天にかかっている時に、光に照らされた庭を巡り歩く若小君は、風情を感じながらも折から秋のわびしい気配を耳にして、「女」のもの寂しさを哀れに思うのである。

(前略) 蓬、葎（もろこし）の中より、秋の花はつかに咲き出でて、池広きに月おもしろく映れり。おそろしきこと覚えず、おもしろきところを分け入りて見たまふ。秋風、河原（かわら）風まじりてはやく、草むらに虫の声乱れて聞こゆ。月隈なうあはれなり。人の声聞こえず。かかるところに住むらむ人を思ひやりて、独りごとに、

若小君 虫だにもあまた声せぬ浅茅生（あさぢふ）にひとり住むらむ人をこそ思へ

とて、深き草を分け入りたまひて、屋のもとに立ち寄りたまへれど、人も見えず。

(①「俊蔭」巻 五一頁)

賀茂の河原からの川風に交じってさつと吹いてくる秋の冷たい風や、人の声がなく、ただ草むらにすだく虫の声々は、このような荒れたところに、たった一人が住んでいて、どんなに寂しいことかと、若小君に思わせている。

琴をみそかに弾く「女」がいることに気付いた若小君は、「女」をこれから隠れていく「月」に擬えて、在原業平の歌「飽かなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ」(古今・八八四)の上句「あかなくにまだきも月の」を口ずさむ。本歌の、酒に酔い部屋（やま）の奥に引き込もうとする惟喬親王に擬えた「月」を奥へ入ってしまった「女」に擬えて、存分に堪能していない月のように逃げないでくれ、と声をかける。

月が次第に山の端に入っていくにつれて、部屋の中も暗くなる。若小君はまた、隠れた後の月の影を奥に入った「女」に擬えて、「立ち寄るとみるみる月の入りぬれば影を頼みし人ぞわびしき」「入りぬれば影も残らぬ山の端に宿まどはして嘆く旅人」の二首の歌を詠み、美しい「女」を匂わして来たのに、「女」がなかなか会ってくれない自らの寂し

い心情を訴えている。

このように、月などの風物は末摘花の琴にも俊蔭の娘の秘琴にも大いに作用している。若小君と俊蔭の娘との逢瀬の場合は、少しづつ沈んでいく月の移行は特に若小君の心理に影響を与えている。彼の中で、哀れな女君のイメージと早く美しい「女」に会いたい心情が生じることによって、その後の朦朧とした情景の元で、感受した「ほのか」な琴の音が一層情調的になるのである。それに対して、末摘花の琴は、梅の香りが漂う春の朧月夜にも、悲しんだ後ようやく出てきた秋の明月にも通うものである。季節の情趣と悲しい境遇が調和されていることによって、上手と言えらるほどではない「ほのか」な琴の音が、風情のあるように聞こえてくるのである。

おわりに

右記のように、「末摘花」巻における源氏が春秋二度故常陸宮邸を訪れる場面に出ている、琴を「ほのかに掻き鳴らし」という表現をめぐって、その一源泉と言われる俊蔭巻における俊蔭の娘と若小君の一夜の逢瀬の場面と比較した。

源氏は元服したばかりの若小君と違って、「雨夜の品定め」以来、空蟬との「はかない縁」、夕顔との「匿名の恋」などを体験している。邂逅により俊蔭の娘の秘琴の「ほのか」な妙音に魅了され、一夜の契りを交わした若小君と比べて、源氏は琴を通じて、理想の女性にめぐり逢い、深みのある恋を求めようとする強い思いを抱いている。言い換えれば、源氏の場合、琴の技量のよさというよりも、荒れ果てた邸に住む故常陸宮の姫君であることに注目して、その琴を望んでいるのである。従って、女主人公の琴に関する描写「ほのかに掻き鳴らし」という表現が同様であって

も、寄せた興味と関心とが違うゆえに、源氏と若小君両者の感受した琴の音色は異なってくるのである。

若小君には、貧窮に陥る身の上の儚さや、若小君に出会ったかすかな喜びなどという複雑な心情を表す俊蔭の娘の「ほのか」な琴が、月の移行と沈んだ後の朦朧とした情景の中、一層情調的に聞こえてくる。その一方、源氏は、父親王がいた頃のことを偲ぶ一つの思いで、昔風に掻き鳴らした末摘花の悲しい「ほのか」な琴を感受し、後見人のいない娘一人の心細さ、悲しみが極まる寂しい心情を理解しようとしている。それに、荒れ果てた邸から伝わってきた、上手ほどとは言えないか細い音色は、月など情趣のある風景に調和されており、故常陸宮の姫君の正体を見届けるまで、春秋二度訪れる源氏に美しい幻想を膨らませているのである。

注

- 1 【花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄】(中野幸一編)『源氏物語古註釈叢刊 第二巻』武蔵野書院 昭和五年十一月 五五頁。
- 2 中川正美著『源氏物語と音楽』和泉書院 一九九一年十二月 五八頁。
- 3 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生 秋山 俊 今井源衛 鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集20』(小学館 一九九四年三月)により、冊数・巻・頁数を示す。以下同じ。
- 4 【うつほ物語】本文の引用は、中野幸一校注・訳『新編日本古典文学全集14』(小学館 一九九九年六月)により、冊数・巻・頁数を示す。以下同じ。
- 5 宮川葉子「末摘花私論」『緑岡詞林』巻五 一九八一年三月
- 6 玉上琢弥著『源氏物語評釈 三』角川書店 昭和四十年五月 三八七頁。
- 7 藤河家利昭著『源氏物語の源泉受容の方法』勉誠社 平成七年二月 四〇四頁。